

2022 年度

共に創る保育

—持続可能な社会の担い手を育む教育課程の開発—



これからの社会を生きていく子どもたちには、どのような未来が待っているのでしょうか。グローバル化や情報化、少子高齢化などの社会の急激な変化に加え、地球の環境問題も山積しています。現時点で、先を見通すことが困難であり、将来の変化を予測できない状況となりつつあります。

このような状況の中、子どもたちには、地球規模の課題を自分事として捉え、身近なところから行動し、仲間と共に課題を乗り越えていく力を備えた人へと成長してほしいと願っています。私たちはそのための教育がESDであると捉えています。幼稚園教育要領前文にも「一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き持続可能な社会の創り手となることができるようにする」とあります。

ESDと幼児教育・保育との親和性は高く、ESDを軸としたカリキュラムの開発とそれに基づく保育実践が重要となってくると考えています。

子どもたちの未来が持続可能な社会となり、一人ひとりがその担い手となることを願い、「持続可能な社会の担い手を育む教育課程の開発」に取り組んでいます。

奈良教育大学附属幼稚園

2022

年度 研究のあゆみ

教育目標の見直し

これまでの教育目標

生き生きとあそぶ子ども
精いっぱいがんばる子ども
友達といっしょにのびる子ども

昨年度までの研究内容やESDの視点から、教育目標新たに作成した目指す人間像・子ども像に基づいて、子どもの育ちを確かめ、育てたい資質能力を導き出し、させながら教育課程の開発を進めている。

を見直し、目指す人間像・子ども像を作成した。実践し、終礼や、ムービーチャットなどで、日々の保育を振り返り、期毎に振り返る。新たにねらいを設定し、教育課程の開発につなげていく。研究と保育実践を往還

昨年度までの研究



ESDは、持続可能な社会の創り手

- 育む教育
 - 様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉える
 - 問題の根本的な要因等にも目を向け、身近なところから取り組む
 - 問題の解決につながる新たな価値観や行動の発案をもたらし
- 【文科省「持続可能な開発のための教育」参照】

新たな目指す人間像

※将来、持続可能な社会の担い手となる子どもたちが大人になったときのことを見通して教育をするために、目指す人間像を作成

創造する

時代によって移り変わること“流行”と変わらないこと“不変”の中から、大切なことを見極め、未知との出会いを恐れず楽しみながら、新たなものを生み出す人を育てたい。広い視野をもって、仲間と一緒に創る楽しさを感じてほしい。

人とともに

自分から周囲の人にかかわり、やりとりを楽しみ、人とともに生きることを楽しめる人を育てたい。人の意見を尊重しながら話し合いを進めたり、仲間と楽しんだりして、一緒に成し遂げる喜びを感じてほしい。

地球とともに

地球の中の一員であることを意識し、大きな視点で物事を見て、自分事として考え、自分の身近なところから行動できるようになってほしい。

新たな目指す子ども像

※目指す人間像に基づいて保育をするためには、目の前の子どもにどうなっていきたいかを考える必要性を感じ、目指す子ども像を作成

創造する

目的に向かって自分なりの考え方や方法を生み出す子ども

自分の思いをもって様々な物事にかかわり、試行錯誤を繰り返しながら探究する力や、遊びや生活をよりよくするために予測したり期待したり確かめたりする力をもつ子ども

人とともに

ありのままを分かり合い、話しかけ合い、分かち合う子ども

自分の思いを相手に分かるように伝え、相手の思いを分かるようにする力をもち、互いのありのままを認め、相手を信頼し尊重しながら、協力して遊びや生活を進めようとする子ども

地球の中で

身の回りの環境に親しんで愛着をもち、自ら積極的ににかかわり、大切にしようとする子ども

身の回りのものや出来事に親しみや愛着の気持ちを持ちながら自分ごととして捉え、積極的ににかかわり大切にしようとする子ども

研究

教育目標の見直し

目指す人間像・子ども像に基づいて保育

日々の振り返り

これまでの教育課程

保育実践

目指す人間像の作成

目指す子ども像の作成

今年度の子どもの姿から期のねらいを設定

フォトチャット・ムービーチャット

職員会議で子どもの姿の振り返り

資質能力について検討

期毎の振り返り

新たな教育課程

1. 日々の振り返り 毎日の終礼で1分トーク(毎日)

〈方法〉

毎日の終礼で1分程度その日の保育について語る。目指す子ども像に基づいて実践を語り合う

〈実際〉

その日の子どもの姿を振り返り、目指す子ども像にかかわる姿や育ちゆく姿について語っている。また、保育者が立てたねらいや保育の内容が子どもにとってどうであったかを振り返ることで、保育者がそのねらいに確信をもったり、子どもとのズレに気付いたりしながら、次の日の保育につなげている。

2. フォトチャット・ムービーチャット(週1)

〈方法〉

保育者が撮影した写真や動画をを使って、視点を決めて保育者同士が語り合う本園が開発した研修スタイル。子どもの姿を事実から詳細に捉え、見とる。今年度は、「創造する」「人とともに」「地球とともに」の3つの視点で語り合う。1週間に1回。

〈実際〉

動画の中の子ども一人ひとりに対して、3つの視点で捉えることで、詳細に見取るにつなげられている。子どもたちの育ちの段階を捉え、この時期の子どもにはどのような力が育ちつつあるのかを見出している。具体的に詳細な資質能力を導き出すことができると考えている。

また、目指す子ども像の3つの視点は、今年度話し合いを重ね、捉え直しながら作成してきた。ムービーチャットで語り合うことで、保育者それぞれであった視点の捉え方や保育に対する考え方が共通のものになっていっている。

※中島、参照

3. 職員会議で子どもの姿の振り返り(月2)

〈方法〉

職員会議でクラスの子どもの姿を振り返る。2週間に1回。

〈実際〉

クラスの様子やこの時期のねらいを伝えると同時に、互いのクラスの様子を聞き合うことで、育ちの見通しをもつにつなげられている。

4. 期毎の振り返り(2カ月毎)

〈方法〉

上記の1, 2, 3.を念頭に置きながら、子どもの姿を1期から4期に分けて捉え、目指す子ども像につながるその期のねらいを設定する。これまでの教育課程と照らし合わせる。

〈実際〉

今年度の子どもの姿を捉え、これまでの教育課程と照らし合わせて、必要な部分を加えている。長いスパンで振り返ることで、子どもの育ちを見通しながら育ちが期待される資質能力について考えることができている。

〈研究〉

資質能力について検討

上記のような日々の振り返り、ムービーチャット、子どもの姿の振り返り、期毎の振り返りから、育ちが期待される資質能力を導き出す。

〈保育実践〉

実践力向上

日々の振り返り、ムービーチャット、などの振り返りが保育実践力の向上につなげられている。

ムービーチャット

事例右下の QR コードを読み取っていただくと、ムービーチャットで使用した動画をご覧いただけます。動画はいずれも約5分です。

満3歳児 IV期(11月)

ダンゴムシと関わる A・B・C 児の様子

自ら選んで遊ぶ際、保育室で飼育しているダンゴムシに関わる A 児と B 児、その姿に興味を持ってダンゴムシと出会う C 児の様子である。

創造する

- A・B 児はダンゴムシと関わりながら見比べる
- A・B 児はダンゴムシを動くもの、動かないものに分ける
- A・B 児は身近にあった玩具(鍋蓋)に動くダンゴムシを入れる

【考察】

身近なダンゴムシに興味を持って関わる中で、動くものと動かないものがあることに気づいている。また、おそらく意識して選びとったわけではないが、普段から気に入っている鍋蓋を使ってみると、ちょうど良かったのかもしれない。どちらも初めから「ダンゴムシを分けよう」「鍋蓋を使おう」と目的を持っているわけではないが、自分の興味の中での偶発の出来事にトキメキ、感覚的に思いついたことを行動している。



人とともに

- A・B 児は興味のあること(ダンゴムシ)が似ていて、2人であることに居心地の良さがある
- C 児ははじめバツタを見ているが、近くにいる A・B 児に気づき、彼らに関わっているものに興味を持つ
- C 児は B 児に押し出されても気にせず、同じ場にしようとする

【考察】

C 児は、「何してる?」と聞くなど、身近な友達がしていることが気になるような姿が最近になって増えており、この動画では、「これ何?」と、友達に関わっている対象が気になっていた。そこでダンゴムシに興味を持ったからこそ、「B の座る場所ないからね」と B 児に押し出されても、怒ることなく、その場にいられているようだ。年齢が小さいうちは特に、人との距離感に無頓着な子も多く、他児と体を寄せ合っても気にしていないこともよくある。だからこそ、同じクラスの友達とともに過ごすことに自然と馴染んでいくのではないだろうか。



地球とともに

- 保育者や他の友達が近くで遊んでおり(動画参照)、安心してじっくりと遊んでいる
- A・B 児はダンゴムシに興味を持って自ら関わっている
- C 児は近くの友達がしていることに興味を持ち、自ら見に行っている
- C 児は近くの友達を通してダンゴムシに出会っている

【考察】

保育者が近くにいたり、いつもの場所(保育室)で過ごすことで、3人とも気持ちが安定して遊んでいる。その安心があるからこそ、身の周りのことに興味を持ち、自ら関わろうとするようになる。また、C 児は〈人とともに〉で見られた、身近な友達に対する興味や関心から、ダンゴムシに出会い、自分も関わろうとしている。身の回りの人やもの・ことに自分から関わろうとする姿は、身の回りのものごとを自分事にして行動する基盤になっていくだろう。



育ちが期待できる資質・能力

- 身近な友達のしていることや、身近な自然物(ダンゴムシ)に興味を持って自ら関わろうとする力
- 身近な友達と同じ場で心地よく過ごす力



3歳児 V期(1月)

砂場で遊ぶA・B・C児の様子

A児B児C児の3人が砂場で電車を走らせたり、樋で橋を作ったり、水を入れて海を作ろうとしたりする様子である。

創造する

○A児は電車が線路を走ることをイメージしながら、砂場の中に電車を走らせたり、橋を作ってその上を走らせたりしている。

○C児は、A児が砂を少し掘ったことと樋を持ってきたことから、海を作ることをヒラメキ、スコップで砂を掘ったり水を入れたりする。

【考察】

A児は電車への興味関心が強く、自分なりにイメージやストーリーがあり、樋を使うことをヒラメキ、それを橋に見立てている。C児はそれを受けて、水を使うことをヒラメキ、海を作ろうと考えて、道具を使って水を入れようとする。友達が置いたモノがきっかけとなり、新たなヒラメキが生まれたようだ。

自分の思いを実現するために道具を選んで使うなど、自分なりに工夫しながら遊んでいる。自分のしたいこと、考えたことが実現できることで、創造する楽しさを感じられるようになっていくのではないかと。



人とともに

○砂場にA児が走らせた電車の跡が付き、それが線路のようになると、それを見てB児C児も電車を走らせ、A児の停車している電車の後ろに並べる。

○樋を持ってきたA児のところに、B児C児が寄ってきて、樋の下に海を作ろうとしたり、橋に見立てて電車を走らせたりなど思い思いにかかわろうとする。会話は少ないが、互いの様子を見たり感じたりしながら遊んでいる。

○B児はA児が置いた樋をどうするかと尋ねたり、A児の樋を置きたいから電車をよけてほしいという言葉を受けて、電車を動かしたりする。

【考察】

それぞれの子どもが自分なりに思いをもち電車を動かして遊んでいる。自分の思いをもって遊びながらも、互いに電車を走らせているということや、線路をつくっているということを感じながら遊んでおり、友達の行為や動きを見て、面白そうだと自分なりにかかわろうとする。自分のしたいことを十分にやる中で、時に友達の動きや行為に刺激を受けて、友達とかわり合いが生まれる。電車や線路というイメージは、場にいるどの子どももわかっているからこそ、同じ場で遊ぶ子ども同士がつながったり離れたったりしながら遊びが展開されていく。自分のしたいことを存分にしながら、友達とのかかわりをもつことの楽しさや面白さを感じることで、やがては友達と目的を共有したり、協力したりすることにつながっていくのではないかと。



地球とともに

○B児C児は、A児が電車を走らせた線路に、自分達も同じように電車を走らせようとする。

○B児は、A児の橋をつくるという声と、樋から刺激を受け、樋の下を掘り、水を入れようとする。

○A児は橋を作ろうと、年中組の砂場から樋を持ってくる。

【考察】

樋をつないで橋をつくることや、樋を年中組から借りてくること、やかんやバケツを使うことなど、自分にとって必要だと思う道具、自分のイメージに合う道具を用いて使っている。これまでの経験の積み重ねにより、自分の身近な環境をよくわかって使いこなしている。

また友達の様子を見て、自分もできるかもしれない、やってみようと思ひ、同じようにやってみようとする。周りの人から刺激を受け、真似たり、積極的に取り入れたりすることが、自分なりに考えて行動することにつながっていく。



育ちが期待できる資質能力

- やりたいことに向けて、必要な物を考え、動く力
- 友達がしていることを感じる力



4歳児 IV期(10月)

片付け場面の様子(マルチパネの片付け)

自ら選んで遊ぶ遊びの片付け終わった子どもたちに、保育者は運動遊び参観で使用した電車(マルチパネで組み立てられた乗り物)と一緒に片付けるよう声をかける。集まってきた子どもたちはそれぞれ自分のできそうな場所、やりたいところから片付け始めて少し時間が経過したところから片付け終わりまでの様子である。

創造する

○片付けの場面で、自分がどう動くかを自分なりに考えている。

【考察】

マルチパネを使って遊んだことのある子どもが多く、組み上げたいいろいろなものを片付ける経験をこれまでも多く積んできている。

パーツ同士の組み合わせによって外すときの力を加減したり、より力が入るように足で抑えたりして、片付けの経験から自分なりに工夫している。

友達の片付けている様子を気にしながら、誰も片づけていないところに自ら片付けに行ったり、困っている友達のところに行き一緒に片付けたりしようとしている。日々行う片付けのルーティーンの中で、その時の場面や状況を見たり感じ取ったりし(トキメキ)ながら自分で判断し行動に移している(ヒラメキ)。



人とともに

○片付けの場にいる友達を感じながら、手伝ったりしながら一緒にしようとしている。

○1人では出来ないことがあるということが分かりはじめておりジェスチャーや簡単な言葉などで伝えて一緒に片付ける。

【考察】

片付けは目的がはっきりしているということに加え、特にマルチパネは片付けの手順がルーティーンになっていることが、友達と力を合わせたり、一緒にしたり、相手の立場に立って考えようとする行動を生みやすいことが考えられる。毎日の片付けの中で、「この部分が外しにくい」ということや、「これは1人では出来ない」ということが自然とわかるようになってきている。その経験をもとに、友達の様子を見て、助けに行ったり、自分から助けを求めたりしていることがわかる。分かりやすい目的で、何度も共通で経験したことがある活動の中で、友達と一緒にやることの必要感や達成感を得ている。日々のルーティーンの中での協同的な行為が、後の自分たちで創り出した遊びでの協同性へとつながっていくと考えられる。



地球とともに

○片付けの場から少し離れたところで、片付けているクラスの友達の様子を見ている。

【考察】

片付けに対して積極的に動いている子どもは、片付けが自分事となっていることがわかる。動画(写真)の2人の子どもは、これまでは片付けの時間になるとその場から離れたり、近くの場にも関係ないことをしたりしていることがあった。しかし、この場面では少し離れた場所に留まり、友達が片づけている様子を見ていた。

「クラスの友達と同じ場所にいたい」・「一緒だと楽しい」という「人とともに」の部分での育ちが支えとなり2人にとっては気持ちの向けにくい片付けも、自分事に捉えられるようになり、子どもの行動が変わってきている。



育ちが期待できる資質能力

- 毎日のルーティーンに自分なりの思いをもったり、かかわったりする力
- 毎日のルーティーンや簡単な目的的活動において、友達の様子も含め、その時々状況を捉えようとする力
- クラスの中にいたいという気持ちをもつ/クラスへの所属意識の高まり



大仏殿をつくる

秋の親子遠足で、奈良国立博物館名誉館員の先生から、東大寺や大仏のこことについて話を聞き、東大寺を訪れた。それがきっかけとなり、東大寺や大仏への関心が高まった。翌日、これまでの経験の積み重ねから段ボールを使って数人の子どもが南大門をつくった。それを見ていた子どもたちも興味をもち、自分なりに他のものがあったことに気付いて、大仏や蓮の花をつくり始める。次第にクラスの多くの子どもたちが様々なかたちで製作に携わっていき、八角燈籠やお供え、チョウチョ、奈良公園の鹿など関連しているものをつくることを楽しんだ。

数人の子どもが大仏の顔を作り始める。それを見た子どもが「大仏様は蓮の花の上に座っている」ということを思い出し、蓮の花を作る。蓮の花を作るために段ボールを切り開き、それを2個組み合わせて花びらを作った。

「鼻の穴が6こ」「穴は2つだけど、1つの穴に3こずつあいていて空気をすうことができる」は、実際の大仏様を見た時には鼻の穴まで見えなかったからと、iPadで再度写真を見て確かめ、描いた。「背中には秘密の扉がある」は、実際に開閉できるように扉と木片の持ち手をつけた。

手は木片を用いて作ることにする。右手の“大丈夫”のポーズ、左手の“願いをかなえてあげましょう”のポーズの意味を思いながら、大仏様と同じ形になるように、大小様々な木片を組み合わせてこだわってつくった。

3～4人の子どもが、黒いガムテープを小さく切り四隅を折り曲げて少し丸みをつけ、大仏の頭に貼りつけて、螺髪を作り始めた。ガムテープをちぎる、角を折る、貼り付ける作業を交代したり、より螺髪に見えるようにと会話をしながら作った。それを見た子どもが「これも螺髪にどう？」とドングリをボードでつける。より立体的に見えたことでアイデアが受け入れられた。それをきっかけに、園内や登園途中に見つけたドングリも貼り付け、徐々に螺髪が作られていった。

自ら選んで遊ぶのびの後、クラスみんなで毎日振り返りを行っている。その日の大仏の写真を見ながら見ているときに耳がないことに気付いた。耳がないと自分たちで作った燈籠からの音楽が聴こえないとの言葉を受けて、耳をつくることにつながった。



創造する

○蓮の花や手、鼻の穴など東大寺に行った経験や、話を聞いたり iPad で調べたりした知識を活かし考えたり試したりして、自分達が見聞きしたことを実現させる。

○友達の考えに刺激を受け、自分なりに表現する素材を選択し、表現の仕方を工夫しながらつくる。

【考察】

自分達が見聞きしたことを、形にしたいという子どもたちの強い思いで遊びが進んだ。話をきいて東大寺に行ったことで、実際に大仏を目にした時、大きく心が揺さぶられ、強い思いになったのだろう。製作過程ではそれぞれの素材に興味をもちながら、考えたり工夫したり協力したりしている。「こうしたい」という探求心をもって予想したり、試行錯誤したりする中で、自分のアイデアや考えを友達に認められることで、できないことをできるように工夫したり、友達の力を借りて諦めずに最後までやり遂げようとする。また、今までの経験からモノの特性を活かし、やりたいことを実現するための方法に気付いていると考える。

人とともに

○自分の考えを友達にわかるように様々な方法で表現したり、伝え合ったりしながら役割分担し、友達と一緒に活動することを楽しんでいる。

○クラスでの毎日の振り返りの中で、互いの状況や目的を共有し、友達の話やつくったものや動画、写真などを見たり聴いたりすることで、次につくりたいものや必要なものを思いつき、つくる。

【考察】

友達の考えに触れることで、再度工夫したり考えたりしながら、それぞれの役割をもって、協力しながら達成させようとしていることがわかる。考えを受容してくれる友達の存在があることで、粘り強く考えようとする力や、友達と目的を共有しながら協力して達成しようとする気持ちにつながったのではないかと。またクラスでの振り返りを行うことで、目的や状況が共有され、さらに友達からの刺激を受けて自分なりに考えたり工夫したりする姿につながっている。共通の目的に向かって、互いの思いや考えを言葉で伝えることで、遊びが更に楽しくなったり、自分達で遊びを進めているという満足感や充実感を味わったりすることにつながったと考える。

地球とともに

○「大仏殿をつくる」という大きな目的を持ち続けながら、「蓮の花をつくりたい」や「手は木片でつくる」「螺髪をつくる」などのそれぞれ自分なりの目的を見つけて実現することを楽しみ、それを重ねながら、クラスみんなで大きな目的に向かって自分のしたいこと、つくりたいことをする。

【考察】

数人の子どもが始めた南大門、大仏づくりが、周りの子どもたちの興味関心につながり、どんどん輪が広がっていった。親子遠足という、クラスでの共通経験とそこでの感動があったからこそ、数人での遊びがクラス全体に広がった。それぞれの子どもが自分の思いや表現したいことを試行錯誤しながら実現させ、その姿や話をクラスでの話題にすることで、周りの子どももまた刺激を受けて作りたいものやアイデアが出てくる。クラスの共通の目的を自分事にして、できることを精一杯しようとする姿につながった。

育ちが期待できる資質能力

○経験や知識を活かして具現化する力

○思いや考えを相手にわかりやすいように伝えながら、共に遊びを進めていくこととする力

○クラスの共通の目的を自分事にしてできることを精一杯しようとする力



こちらのQRコードを読み取っていただくと、エピソードに関連する写真のスライドショーをご覧いただけます。